伝馬鳴作「事師法五十頌 (Gurupañcāśikā)」をめぐつて

頼　富　本　宏

従来馬鳴 (Aśvaghoṣa) には数多くの著作が帰されている。その中には Buddha-carita, Saundarananda のように，馬鳴の真作であることが確定しているものもあれば，逆に疑問の持たれる作品も存在する。それら馬鳴に帰される著作については，金倉博士の「馬鳴の研究」に詳しいが，ここではその一つである「事師法五十頌 (Gurupañcāśikā)」を取り上げ，それがカニシュカ王時代の馬鳴の作か否か，またその内容は如何なるものかを考察したい。

ところで Gurupañcāśikā (以下 GP と略す) に関しては，すでに酒井博士の研究がある[1]。酒井氏は GP の漢訳とチベット訳，および作者不明の註釈書 Gurvārādhanapañjikā (以下 GAP とする) のチベット訳を資料として，GP が馬鳴の真作でなく，後期密教の作品であるとされている。筆者の結論も全くそれを出るものではないが，二，三の新しい資料を用いることによつて，GP の性格をより明らかにしたい。なお GP の具体的構成などは酒井氏の研究に譲つて，ここでは主に他の諸文献との関連における GP の位置等に注目したいと思う。

GP は梵・蔵・漢三種のテキストが残されている。梵本は Sylvain Lévi によつて他の幾つかの馬鳴に帰せられている著作とともに発見され，後に Journal Asiatique に紹介された[2]。これは第33偈までしかなく，コロフォンも欠如している。しかし漢訳，チベット訳の表記から従来馬鳴の作とされている。次に漢訳は大正大蔵経番号第1687番で，馬鳴菩薩造，日称等訳となつている。日称は宋代に印度から来た人で，宣梵大師の号を持ち，入宋僧成尋とも親交があつたと伝えられている。チベット訳は Bstan-ḥgyur のタントラ部に収められ (東北 No. 3721, 北京 No. 4544), Rta-dbyaṅs (Aśvaghoṣa) 作，Padmākaravarma, Rin-chen-bzaṅ-po 訳とある。また酒井氏が使用した GAP の他に，チベット人の註釈書として，Tsoṅ-kha-pa の「事師五十頌広釈 (東北 No. 5629)」がある。これらを主

1) 酒井真典：事師法について，高野山大学論叢第7巻，pp. 1-60.

2) S. Lévi: Autour d'Aśvaghoṣa, JA, Tome 215, 1929, pp. 259-261.

な資料としながら GP なる書の特色を明らかにして行きたい。

まず重要なのは作者の問題である。すなわち本書が有名な仏教詩人である馬鳴の真作か否かである。Lévi は GP に見られる密教的な用語に疑問を抱きながらも，タントラ仏教の起源が相当古く遡り得ることを認め，真偽についてははつきり断定しないものの，消極的に馬鳴説を支持しているように見受けられる。国訳一切経（論集部5）中の「事師法五十頌」の解題も同様であり，「仏教詩人馬鳴の作と暫く見做しても差支えない性質のもの」と評している[3]。

しかし筆者が梵・蔵・漢の三本を比較対照し，かつその註釈書および他の文献中に散見される GP の断片から，その仏教史的位置，思想的内容を検討した結果，酒井博士の指摘の如く，GP は決して2世紀の馬鳴のものではなく，後期タントラ仏教に属する著作であることが明らかとなつた。以下もう少し詳しく論じたい。

GP では仏道修習において正しい師に仕え，正しき導きを得ることの必要性が強調されている。それだけであれば馬鳴の真作とすることも可能かも知れない。けれどもそこに見られる用語が問題である。梵本中の vajrasattva, vajradhara, vajrācārya, mantra, tantra 等の語は Saundarananda などの著作には決して見られない。これらの用語は通常タントラ仏教の名で呼ばれる後期密教に属する。GAP も Tsoṅ-kha-pa の註釈もこれらの用語に対して密教的解釈を施している。

その一例として mūlāpatti という語を取り上げよう。チベット訳第49偈に次の表現がある。

「次いで真言等を与えることによつて，正法の器となつて，十四根本罪をまさに読みかつ受持すべきである[4]」

この個所は梵本では欠けており，漢訳では訳出が不十分な為に余り注目されていないが，この文中の「十四根本罪（rtsa-baḥi ltuṅ-ba bcu-bshi）は明らかに金剛乗仏教の規範集である十四根本罪（caturdaśamūlāpatti）を指している。GAP はそれら十四を具体的に列挙している。十四根本罪に関しては別の機会に論じたが[5]，mūlāpatti は sthūlāpatti と並んで金剛乗仏教の価値観，倫理観を代表する規範集である。従つて GP が金剛乗タントラ仏教に属するものであることが知られるのである。

次に他の文献中に見られる GP の位置からその性格等を眺めたい。GP は多く

3）国訳一切経，論集部 5, p. 241.

4）北京版西蔵大蔵経第81巻，206-2-1.

5）拙稿：Āpatti 論書群について，密教学 9, pp. 56-83.

の著作に引用されているが，代表的なものに次の二つがある。第一は Śraddhākaravarma の Yogānuttaratantrārthāvatārasaṃgraha である。本書は無上瑜伽タントラの教義，修道体系を各種の経典やタントラを引用してまとめ上げた綱要書であるが，「尊敬して阿闍梨に仕えること」を説く個所で見られる，

「復次に一切のタントラの密意を摂した事師法五十頌において説かれている[6]」

という言葉は，GP のタントラ仏教上の位置を示すものとして興味深い。

第二は Anupamavajra の Ādikarmapradīpa である。これは Kriyātantra の一種と言われているが，弟子の師に対する帰依を説く個所で，GP が Gurvārādhana の名前によつて五偈ほど引用されている[7]。なおこの言及によつて GP が時に Gurvārādhana の名で呼ばれていたことが知られる。

最後にチベット人の著作で GP を引用するものを一つあげておきたい。それは Tsoṅ-kha-pa の密教面での後継者である Mkhas-grub-rje の「総タントラ部建立広釈（東北 No. 5489）」である。そこでは灌頂を与える尊師の性格を論じることに関連して，本書の名前を明記してその第8偈の一部を引用している[8]。これらの諸引用からも明らかなように，GP は密教的修道体系において最も重要である師弟道の在り方を説くものとして重視されていたのである。

以上の例証から GP がかの馬鳴の作ではなく，より後期の密教の作品であることが明確となつたが，最後に著者の問題についてもう一度触れておきたい。

蔵・漢二本の言及と，先述の Ādikarmapradīpa において，Daśākuśalakarmapatha, Ṣaḍgatikārikā など通常馬鳴に関係付けられる著作とともに GP があげられていることから，GP が少くとも馬鳴（Aśvaghoṣa）なる人の作であつたことは疑いない。この場合偶然に Aśvaghoṣa という人が存在したのではなく，むしろ仏教詩人のそれを意識してその名前をつけたのであろう。殊にタントラ仏教では，Nāgārjuna, Āryadeva, Candrakīrti など著名な大乗仏教者の名を持つた修行者，およびその著作が存在している以上，Aśvaghoṣa という名を持つた密教者がいても不思議ではない。なお密教者 Aśvaghoṣa の問題，あるいは Ṣaḍgatikārikā, 二種の Bodhicittabhāvanā などの作者 Aśvaghoṣa と GP のそれとの関係等については，さらに検討が必要であろう。

6）北京版西蔵大蔵経第81巻，158-5-2～3.

7）Louis de la Vallée Poussin: Bouddhisme, Études et matériaux, pp. 195-196.

8）F. D. Lessing and A. Wayman: Mkhas grub rje's Fundamentals of the Buddhist Tantras, p. 272.